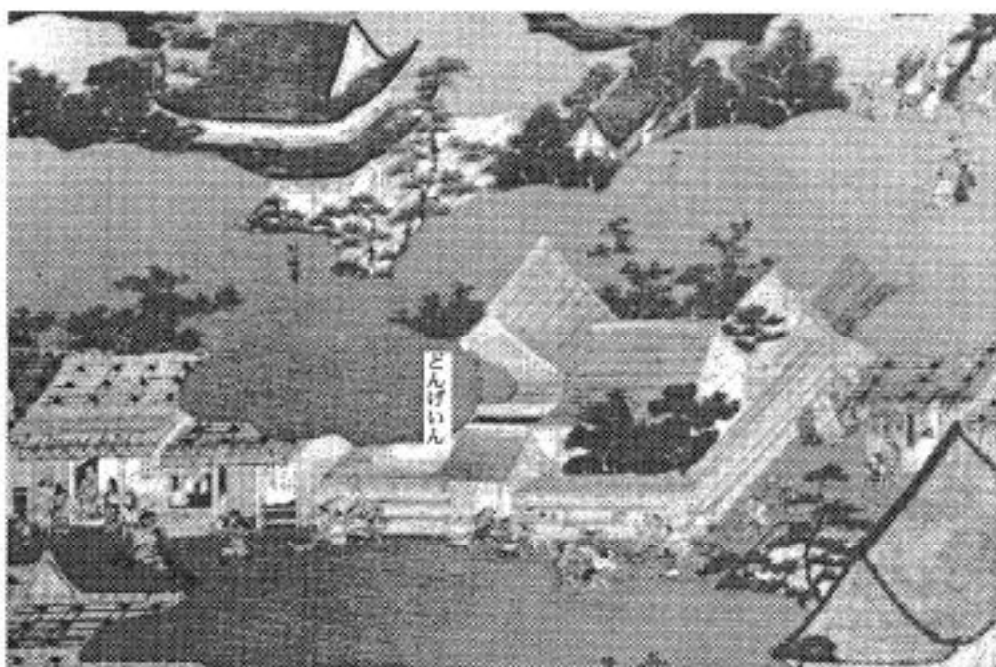


## 平安京左京三条四坊四町

—高倉宮跡・曇華院跡の調査—  
説明会資料



洛中洛外図屏風（上杉家蔵）

2001年11月18日  
（財）京都市埋蔵文化財研究所

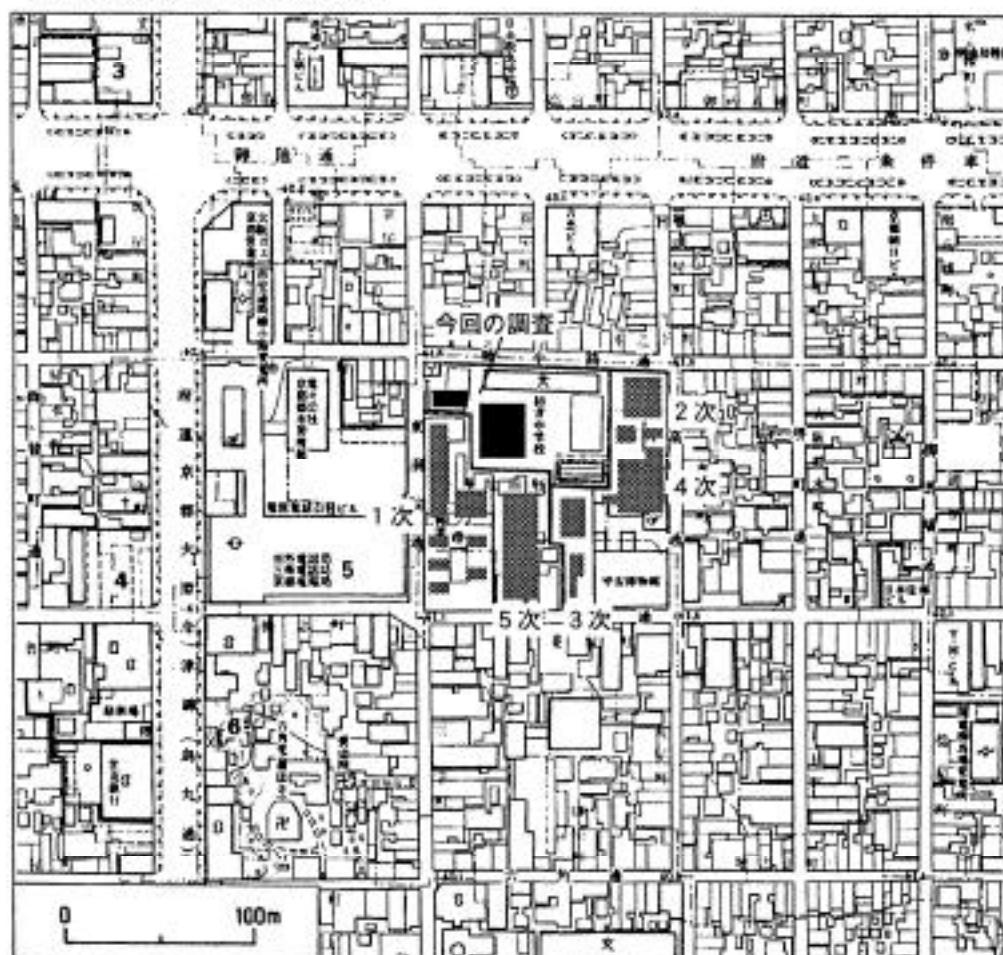


調査地：京都市中京区東洞院姉小路東入曇華院前町  
 調査期間：2001年6月15日～継続中  
 調査面積：総計966.5平方メートル  
 調査機関：(財)京都市埋蔵文化財研究所

京都市の子どもカウンセリングセンター（仮称）建設に先立つ埋蔵文化財の発掘調査を6月半ばより実施している。調査地は元初音中学校の敷地内で、平安京の条坊では左京三条四坊四町にあたる。平安後期には高倉宮、中世から近世には通玄寺曇華院が存在したことが文献により明らかとなっている。

高倉宮は後白河法皇の第2皇子である以仁王が住んでいた邸宅とされる。以仁王は平家追討の令旨を発したことにより、平氏政権に追われ、宇治川の合戦で破れるという話は平家物語でも有名である。通玄寺曇華院は、順徳天皇の孫四辻宮尊雅王の娘智泉聖通を開祖に14世紀後半に成立、幕末まで当地にあったとされている。

### 左京三条四坊四町の調査



- 第1次調査 『東洞院大路・曇華院跡』平安京跡研究調査報告 第3輯 昭和52年
- 第2次調査 『平安京高倉宮・曇華院の発掘調査』昭和54年
- 第3次調査 『平安京高倉宮・曇華院跡』平安京跡研究調査報告 第8輯 昭和58年
- 第4次調査 『高倉宮・曇華院跡第4次調査』平安京跡研究調査報告 第18輯 昭和62年
- 第5次調査 『平安京左京三条四坊四町（京都市中京区曇華院前ノ町）京都文化博物館（仮称）調査研究報告第2集 1988

## 文献資料から見た左京三条四坊四町の沿革

### 10世紀（900年代）

#### ○土地売券

応和元年（961）八月十五日付け「三条令解」、『朝野群載』巻21

文献資料にこの町が初めて登場する。記事には、四町の西側四分の一町の土地を売買したことが記されている。

### 11世紀（1000年代）

### 12世紀（1100年代）

○悪霊の出る不吉な場所「鬼殿」のあだ名……『今昔物語』巻第27

#### ○高倉宮

『山槐記』治承四年（1180）五月十五日の条…向三條北高倉西亭…

検非違使・源兼綱が平家の命をうけて以仁王を捕らえに行くという場面。この記事により以仁王が住む高倉邸は三条四坊四町にあることがわかる。

### 13世紀（1200年代）

#### ○いくつかの宅地に分割

『明月記』建保元年（1213）一月十五日の条

右近衛中将藤原成定の邸宅、故大膳大夫平業忠の遺邸、入道三品源頼兼の邸宅があったらしい。

### 14世紀（1300年代）

○瑞雲山通玄寺曇華院…順徳天皇の孫四辻宮尊雅王の娘智泉聖通（智泉尼）開祖

康暦二年（1380）12.8 通玄寺仏殿起工式

至徳二年（1385）智泉尼が通玄寺内に庵室を建てて隠居、庵室を曇華と号す

嘉慶二年（1388）智泉尼没 80歳

### 15世紀（1400年代）

『教言卿記』大永十四年（1407）5.27 …三條東洞院通玄寺西頼扇屋…

応仁元年（1467）焼亡か

文明十七年（1485）曇華院修造が具体化（築地塀）

文明十九年（1487）開祖智泉尼の百年遠忌法要 このころ困窮

### 16世紀（1500年代）

大永七年（1527）3.3火災

天文廿一年（1552）後奈良院の皇女聖秀尼が入寺、再興

天文～永禄ころ 上杉家蔵『洛中洛外図屏風』そのころの風景

### 17世紀（1600年代）

慶長八年（1603）12.19火災、焼失

寛文年間（1661～73）後西院の皇女聖安尼入寺、再興→中興の祖

### 18世紀（1700年代）

宝永五年（1708）宝永の大火、焼失か

第25世聖祝尼入寺、再建

天明八年（1788）正月 類焼、再建？

### 19世紀（1800年代）

文化四年（1807）『竹ノ御所』号を勅許

文政十年（1827）第27世秀峰尼死後、無住

元治元年（1864）7.19兵火により焼失

明治6年（1873）46年間無住の後、清山慈廉尼28世となる。朝命により嵯峨野の旧鹿王院の子院瑞応院跡に移転

明治6年（1873）府立集書院（東洞院側）→明治15年閉鎖

明治26年（1893）初音小学校が高倉御池上る柵町からこの場所に移転→昭和22年、初音中学に変更

## 発掘調査の成果

近世の調査では、石組、せん組の井戸をはじめ、大型の土壙を多数検出している。大型の土壙は半地下式の遺構をごみ捨て穴などに転用したもの、土取り後の穴をごみ捨て穴として利用したものなどがある（5頁参照）。17世紀後半から18世紀初頭頃に埋まったと見られる大型の土壙から、華南三彩の盤がほぼ完全な形で出土している。また井戸SE02からは、焼け土とともに敷きせんが多数出土している。敷きせんはお寺のお堂などの床に敷き詰められる今でいうブロックで、曇華院との関係が注目される（7頁参照）。

中世以前の調査では、石組、縦板組などの井戸、柱穴、土取りとみられる土壙、土地を区画するためとみられる溝、櫛列などを確認している（6頁参照）。現在までで確認している一番古い遺構は11世紀後半代くらいの井戸で、それ以降12世紀、13世紀、14世紀の遺構がそれぞれ認められる。その中でも一番多いのは15世紀から16世紀にかけての井戸、柱穴、溝などである。後奈良院の皇女聖秀尼の入寺に伴い再興された時期のものと思われ、上杉家蔵の洛中洛外図屏風（表紙参照）に姿を現すその時代にあたる。決定的な遺構は見つかっていないが、柱穴、区画溝、井戸の分布などや、これまでの周辺の発掘調査の分析をとおして、曇華院の姿をある程度明らかに出来ると考えている。高倉宮についても確たる遺構は未検出であるが、井戸SE133はその時期の遺構である。



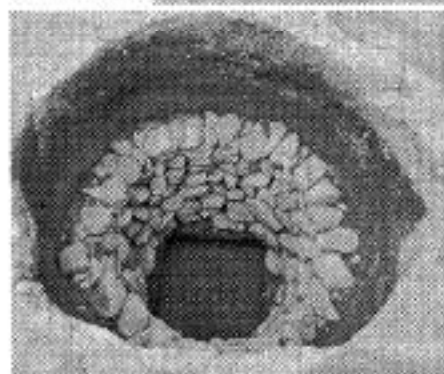
調査前の状態（東から）2001年6月7日撮影



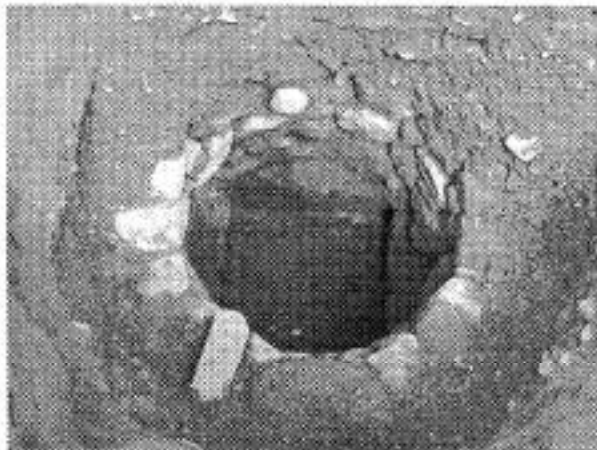
「高倉宮跡」の石碑。元初音中学校西玄関に建っていたもの



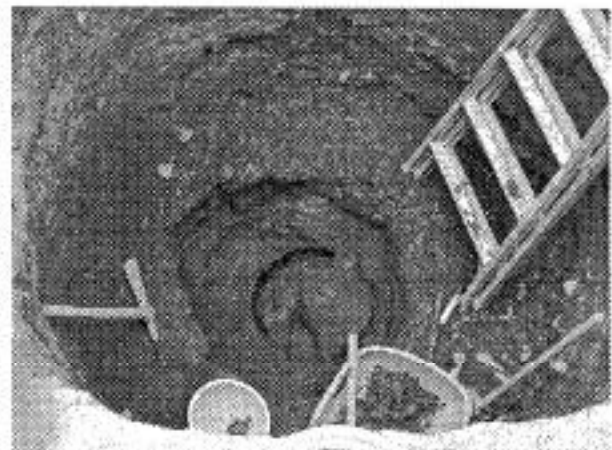
江戸時代以降の遺構の全景（北から）



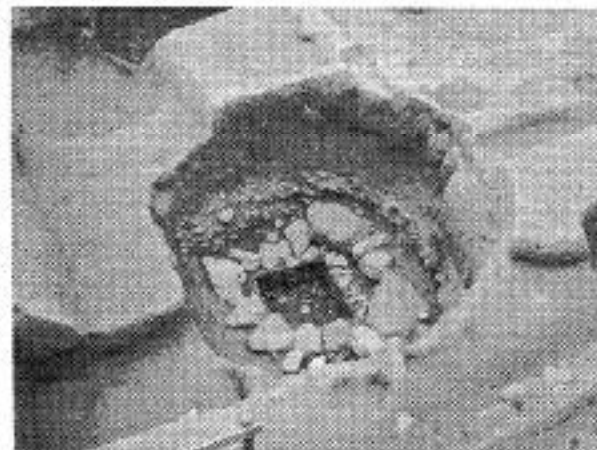
江戸時代の石組井戸・SE48（南から）



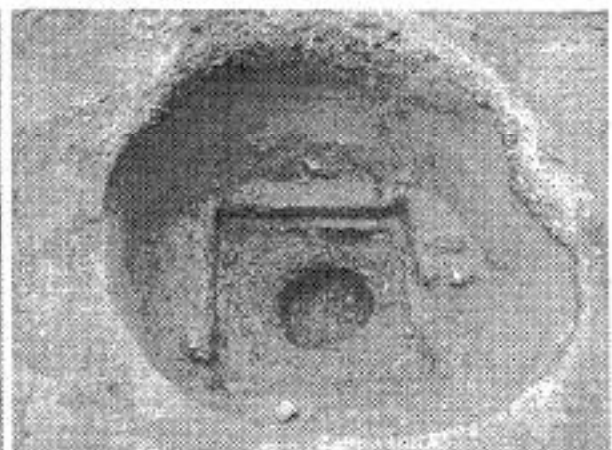
室町時代後半の石組の井戸。底部に方形横板組の木枠の痕跡が残る・SE94。(南から)



室町時代前半の縦板組の井戸。底部には曲物が設置されている・SE270。(南から)



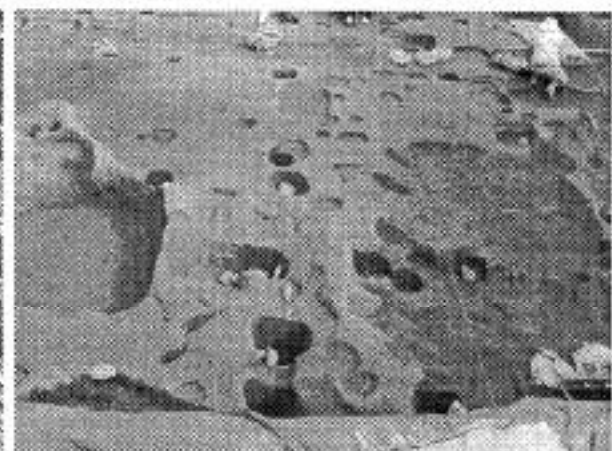
平安時代末期から鎌倉時代初頭に埋まった井戸。石組みが残り、底部は横板の方形の枠を設置する。高倉宮の時期にあたる・SE133。(南東から)



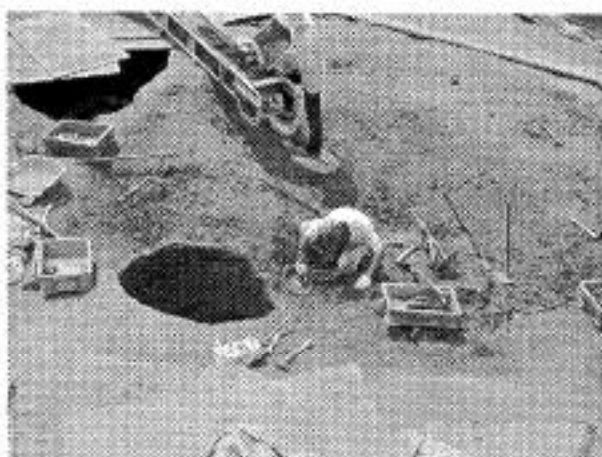
平安時代後期の方形縦板横棧組の井戸・SE79。(東から)



中世の柱穴群、溝。(北西から)



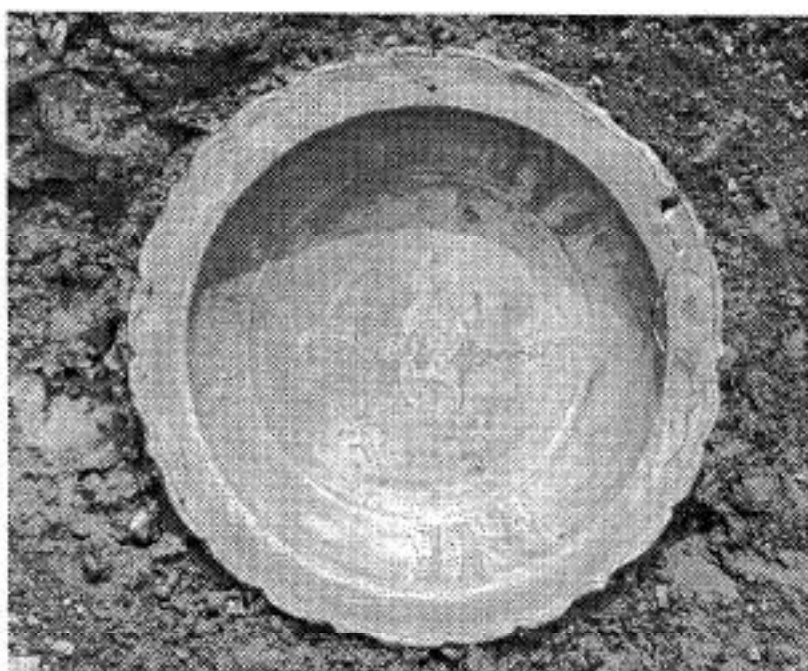
中世の柱穴群、土壇など。柱穴には底部に礎石を据えるものがあり、並びが確認できるものもある。(西から)



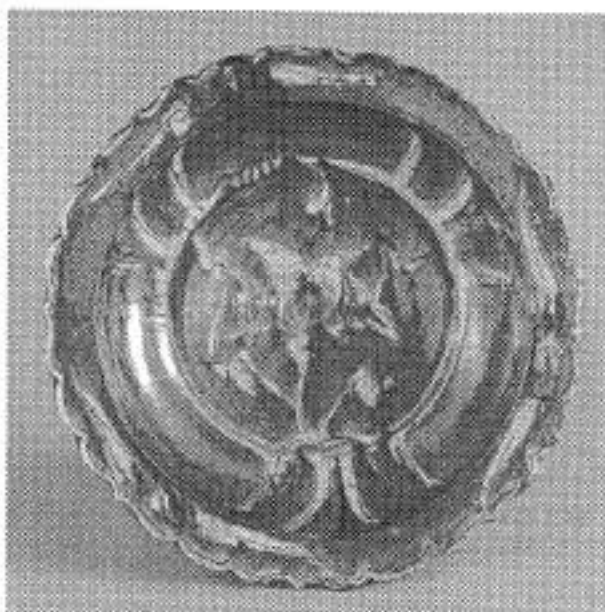
土壙SK74掘下げ中に華南三彩盤が出土(東から)



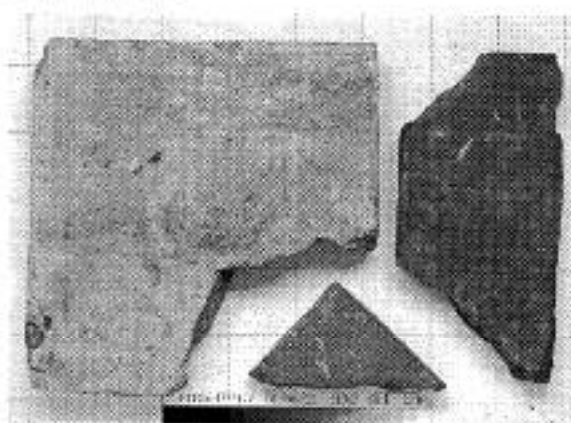
華南三彩盤の出土状況・SK74(南から)



土壙SK74より出土した華南三彩刻花花文輪花盤

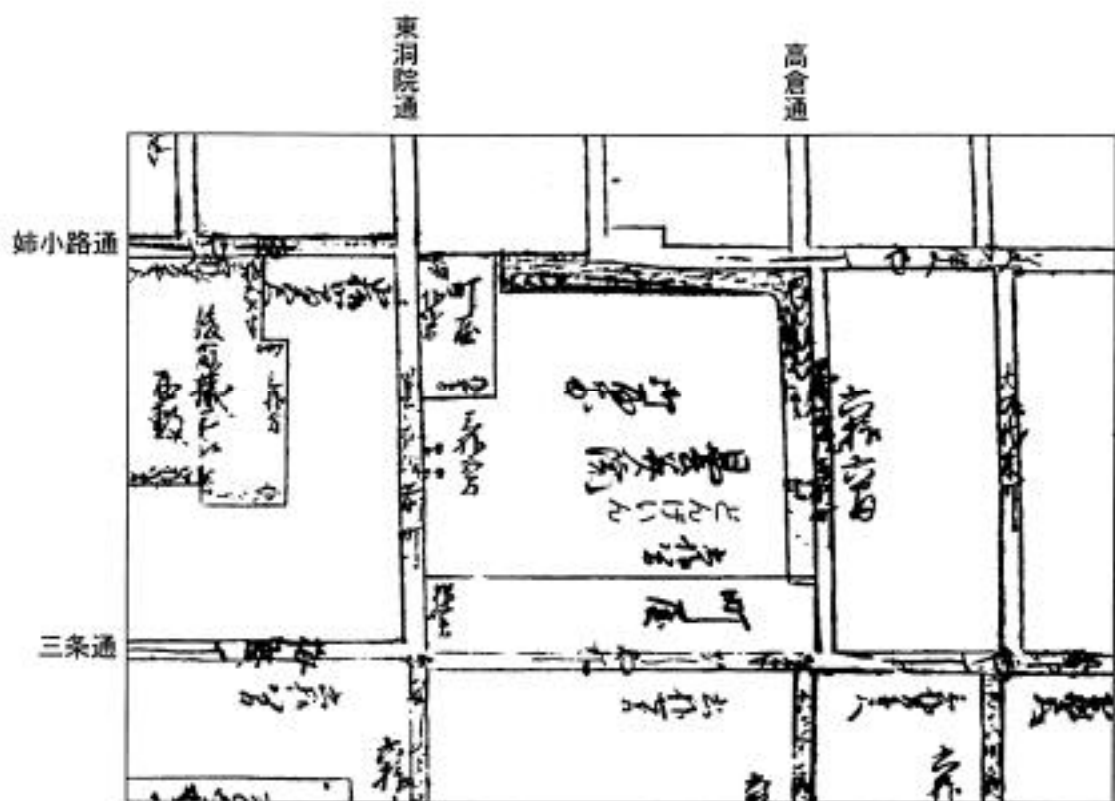


土壙SK74より出土した同文の華南三彩刻花花文輪花盤『華南のやきもの』黄瀬戸・織部・青手古九谷の源流を求めて 図録鑑賞シリーズ1 根津美術館 1998』より



井戸SE02より出土した敷きせん





寛永十四年洛中絵図（宮内庁書陵部蔵）